

川本裕子著「イギリスからの刺激 ユーモアとオープンな議論—半歩遅れの読書術」日本経済新聞 2016年8月7日朝刊を読む

## ユーモアとオープンな議論

1. 大学受験直前の冬だというのに『百万ドルをとり返せ!』（永井淳訳、新潮文庫）を読んだら、テンポのよい展開と魅力的な登場人物に夢中になってしまった。陽気で軽妙な、頭脳勝負の「コンゲーム(詐欺)」小説の傑作だ。ジェフリー・アーチャー作品はほとんど読んだ。後にスキャンダルで世間を騒がせた著者だが、ストーリーは痛快絶妙だ。
2. 私は大学を卒業すると銀行に勤務し、夫が勤務先から派遣されたオックスフォードと一緒に留学した。イギリス知識人の生活や大学の儀式などを実見している最中にもう一度原書を読み直し、面白さが倍増した。
3. 大学院を修了し、マッキンゼーに勤務した。登場人物のステイーヴンのようなハーバード出の切れ者とも、詰めの甘いデイヴィッドみたいな同僚とも仕事をした。一方で、ポーランド移民の立身出世の大富豪で詐欺も働くメトカーフさながらのアメリカ人と話す機会もあった気がする。
4. そして現在、大学院で金融について講義をし、英エコノミスト誌を学生と毎週読んでいる。後で気づいたが、マッキンゼーもエコノミスト誌も文中に出てくる。私にとって「予言の書」だったのかもしれない。
5. いつもイギリスから知的刺激を受けてきた。批判精神は旺盛だが、ウイットに富むユーモアがなければ失格だ。フェアプレーの尊重が、自由でイノベーティブな議論を生む。
6. グレアム・グリーンやマイケル・コルダのリズムのよい文章も好きだったし、マギー・スミスやヒュー・グラント出演の映画にはいつも目が行く。ドラマ「ダウントン・アビー」は日本放映を待たず、ビデオを取り寄せて見てしまった。
7. 世界の知性が読むと言われるエコノミスト誌だが、1988年に日本の女性の地位がとても低いという記事が出た。留学中の私が「日本の性別分業意識はあまりに強くてそれが克服される必要がある」と手紙を書いたら、翌週の投稿欄に掲載された。
8. 異なる立場からの意見を直くに議論の土俵にあげる懐の広さ、オープンさは衝撃だった。『イギリス史』（全3巻、大野真弓監訳、みすず書房）を書いた歴史家トレヴェリアンがイギリス人気質として挙げたオープンな土壌を実感した。自分の意見をきちんと言えるようになりたいと強く思ったのはそれ以来だ。

9. 今回の EU 離脱問題では、残留派も離脱派も同じ時期にオックスフォードで学んでいた面々が多い。洞察力と指導力に富む彼らでも庶民の気持ちを読み間違えたのは、ゲーム好きが高じたからだろうか。大陸欧州との距離感は歴史上常に微妙だが、成熟し、冷静なはずのイギリスだから、この難所を軽やかに乗り切ってほしいと願う。ユーモアたっぷりの知恵で。

<コメント>

(1) ジェフリー・アーチャーの作品は私も大半を読んでいるので、親しみのもてる文章だ。

(2) 大学院で金融論を講義の中で週刊経済誌「エコノミスト」を学生と毎週読むことは素晴らしい試みだ。

是非参考にして頂きたい。

— 2016年8月17日(水) 林 明夫記 —